事業順調、中国市場拡大に期待

南通市の宇部興産グループ2社

生コン、タイヤ用などBR製造

中国南通市にある宇部興産グループ二社の事業が順調に推移している。生コンクリートを製造、販売している南通宇部コンクリート有限公司と、ポリブタジエンラバー（BR）を手掛ける台橡宇部（南通）化学工業有限公司で、今後も生産量の増加が見込まれ、一層のビジネス規模拡大に期待が掛かる。同国上海市から直線距離で約百キロ、高速道路を利用して約二時間半の場所にある両社を訪問した。

南通宇部は、成長する中国のセメント・生コン市場をにらみ、宇部興産の100％子会社として二〇〇五年七月に設立。〇六年八月から生産を開始した。高品質の生コンを提供するため、工場から二十キロ圏内を対象に製品を運搬。遠く離れた南通市の道路でも宇部市内と同じブルーの車体のミキサー車が走っている。

〇六年は五万五千立方メートルだった生産量は、翌年は三十七万三千立方メートル、〇八年は六十二万四千立方メートル、昨年は七十二万五千立方メートルと着実に増加。〇八年以降は、南通エリアにある生コン会社四十八社の中で出荷量ナンバーワンの座を維持している。

昨年三月からは、南通市で王子製紙が建設している製紙工場の仕事を請け負っており、現場にプラントを設置。本社工場との二拠点体制で安定生産が続き、今年の生産量は過去最高の九十二万立方メートル、売上高は最初の年に比べて約十五倍となる三十億円を見込んでいる。

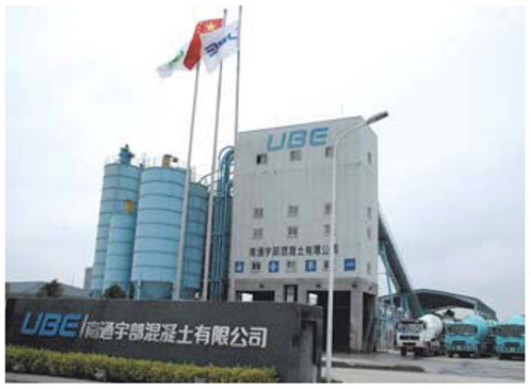
現在の従業員数は百三十九人。ミキサー車三十一台、ポンプ車六台を所有し、二十四時間体制で生産している。同社の藤嶽暢成総経理（社長）は「中国では道路や砂防ダム、堤防など社会資本の整備率は低く、需要はまだまだある。南通を中心にマーケット拡大に努めていきたい」と話す。

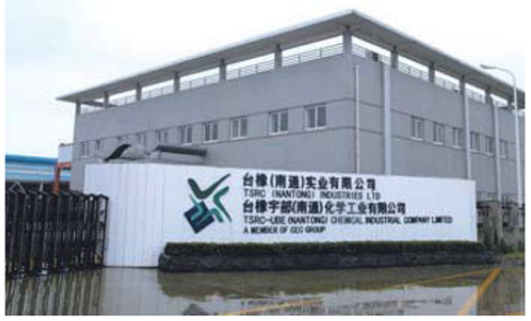
台橡宇部は、台湾の石油化学メーカー、日本の丸紅との合弁会社。〇六年十二月に設立された。翌年一月に工場建設が始まり、〇九年五月から本格稼働。生産を開始して、ちょうど一年となる。

宇部興産の技術ライセンスによりBRを製造しており、年間生産能力は五万トン。製品はタイヤやスポーツシューズの靴底、ゴルフボールなどに使われ、約七割はタイヤ用。出荷数量は三社の出資比率で決まっており、宇部興産は製造量の25％分を「UBEPOL（ウベポール）」のブランド名で中国国内で販売している。

世界経済が低迷していた〇九年三月ごろから、中国では既に自動車販売は回復が始まったといい、現在の同国内のタイヤ需要は逼迫（ひっぱく）しており、台橡宇部の今年一―三月期の出荷量は計画通りと、順調な滑り出しだ。一〇年はフル生産が見込まれ、予算では〇九年に三十八億円だった売上高を百億円に設定し、初の純利益も四億円を予測。一一年には年間生産能力を七万二千トンにする増強計画も進めている。

台橡宇部の中村裕之副総経理（社長）は「中国市場は好調で、日系タイヤメーカーもさらに進出してくると思うので、一一年中に増設工事を無事に終え、しっかり販売していきたい」と抱負を語った。（枡永）





南通宇部コンクリート有限公司（上）と台橡宇部（南通）化学工業有限公司（いずれも中国南通市で）

経済ニュース

香港・華南地区の日系企業ビジネス交流会
6月4日に中国広東省で

山口銀行（福田浩一頭取）など主催の第三回「香港・華南地区日系企業ビジネス交流会」は、六月四日午後二時から中国広東省深圳市で開かれる。参加無料。

中国のビジネス環境の情報取得、日系企業同士のネットワーク拡大といったニーズに応えるため、香港に拠点がある地方銀行十七行が合同で開催。日本貿易振興機構（ジェトロ）による進出企業支援セミナー、日系企業同士で情報交換してもらうビジネス交流会などが行われる。

会場は深圳シャングリ・ラ ホテルで、時間は午後二時から七時まで。

問い合わせは同行国際部国際営業推進グループ（電話083―223―1495）へ。（枡永）

県内倒産企業
4月は3件

帝国データバンク山口支店がまとめた四月の負債額一千万円以上の法的整理による県内企業の倒産件数は、前月比四件減の三件、負債総額は22・1％減の八億五千万円だった。

業種別では、小売業、運輸・通信業、不動産業各一件で、建設業がなかったのは、七カ月ぶり。地域別では、周南市二件、山口市一件。原因はすべて販売不振だった。

カテコールとハイドロキノン
宇部興産、値上げ

宇部興産（竹下道夫社長）は、二価フェノール製品のカテコールとハイドロキノンの値上げを決めた。

原燃料価格高騰による生産、輸送コストの上昇分を製品価格に転嫁する。値上げ幅は、いずれも15％で、対象は六月一日出荷分から。

テント手掛けて半世紀

宇都宮テント商会

頑張る地元企業 51

オーダーメードが人気

新たな「帆布かばん」軌道に

社長の妻・久美子さんら2人の職人が縫製を担当する

半世紀を超える歴史を持つテント会社。十二年前に社屋を宇部市西梶返から山陽小野田市掃山に移した。三年前から製造・販売を開始した帆布（はんぷ）かばんは、丈夫な生地と、自由にアレンジできるオーダーメード生産が受け、発注してから受け取るまで二カ月待ちという高い人気を誇る。

一九五八年三月、宇都宮彰一社長（五九）の父、勇さん（故人）が創業した。トラックの荷台に掛けるシート、運動会でよく見る野外テント、飲食店、幼・保育園をはじめとする多種施設の日よけなど多種を取り扱う。ほとんどが受注生産で、発注者の話をしっかりと聞いて、期待に応える製品を作っている。

不況のあおりで八年ほど前から、仕事量が少しずつ減った。回復の兆しが見えない経済情勢の中、病に倒れた社長から経営を任されている長男・秀彰さん（三三）が、誰もが持っているかばんに着目。江戸時代に帆船の帆として使われていたことから名前が付いた厚手の布を材料に、テント屋オリジナルのかばんを次々と開発していった。軌道に乗った現在も、その姿勢は変わらない。

ショルダー、トート、リュック、ボストン、マザーズ、カメラと幅広い種類のバッグがあり、既製品のほか、本体サイズをそのままに縫い糸や取っ手の色など一部を変える「イージーオーダー」、サイズやデザインなどすべてを思い通りにできる「オーダーメード」も受け付ける。

口コミで徐々に売り上げを伸ばしていたが、最近、人気タレントが出演するテレビ番組に取り上げられた反響で、オーダーメードは現在二カ月待ちと、注目を集めている。

社長プロフィル

宇都宮彰一（うつのみや・しょういち）1951年1月6日、宇部市生まれ。宇部高から九州大工学部建築学科に進み、卒業後家業を手伝った。99年社長に就任したが、5年後に脳梗塞（こうそく）で倒れ、社会復帰を果たしているものの記憶や言葉の後遺症を自覚している。好きな言葉は「生きてるって素晴らしい」。

山陽小野田市掃山にある社屋

会社概要

▽社　　名　宇都宮テント商会
▽創　　業　1958年3月
▽本社所在地　山陽小野田市掃山1丁目6―18
▽代 表 者　宇都宮彰一
▽従業員数　4人
▽電　　話　84―7990
▽ファクス　84―7447
▽ホームページアドレス
http://www.utsunomiya-tent.jp

宇都宮秀彰さん

「自作の商品を世界一にしたい」

帆布かばんの発案者、秀彰さんは「自分の作ったものを世界一にしたい」と情熱を燃やす。かばん作りを始めたことで、客層も変わり、人との出会いも増えたという。

かばんに付けるロゴは、自身の燃える情熱の色と、五輪の勝利者に贈られることでも知られている月桂（げっけい）樹をあしらい、かばんに懸ける思いを表している。（岩本）